The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

覚鑁における心身平等説

亀山隆彦

序論

父母所生の身そのままでの成仏を説く密教の教理にあって、その研鑽に余念の無かった密教僧達が、他方で心身間にいかなる関係性を構想していたかとの問題には、湯浅泰雄氏や吉田宏哲氏、近年は大久保良峻氏も検討を加えている。(1) 本論では、それら先行研究で未だ注目されることの少ない、覚鑁（一〇九五―一一四三）の心身の関係論について考察を試みる。

先行する空海（七七四―八三五）や円珍（八一四―八九一）の心身論と比較するに、覚鑁に特有の理解として第一に注目されるのは、『般若心経秘鍵略註』の「金胎本ヨリ不二身心常ニ即一ナリ」との文言である。覚鑁の密教思想の基調を為すとも評される両部、及び理智間の不二説を踏まえての、心身間での不二・即一の関係が説示されている。(2)

更に、その『般若心経秘鍵略註』では、心身は共に一心そのものでもあるから、また即一とされるのであって、心をして身の根元とも扱う。一心ないし心の下、両部、理智、色心の諸法が一となるとの主張は、覚鑁の著作に枚挙に遑が無く、天治元年（一一二四）、覚鑁三十歳時の作である『心月輪秘釈』でも、心＝月輪が色心の万法を摂す、金胎両部の総名等と明記される。加えて本書において、覚鑁は、その月輪と衆生の身とを指して同義であるとも述べる。『般若心経秘鍵略註』の製作時期は未詳であるが、右の『心月輪秘釈』の記述を鑑みれば、心身間の不二・即一説自体は、その思想展開のごく早い段階から、覚鑁の内に胚胎していたとも推測される。

一方、『心月輪秘釈』からは六年後の、覚鑁が三六歳となる大治五年（一一三〇）以降に成立する『覚鑁聖人伝法会談義打聞集』（以下『打聞集』）には、衆生の身を大日如来の本有の身と説き、心身を個別・平等に常住の存在ともする覚鑁の言が記録される。心身の不二・即一に対する、言わば而二・平等説が表明される。同説は、覚鑁が四七歳の永治元年（一一四一）以後、康治二年（一一四三）に四九歳で没するま

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

でに完成される『五輪九字明秘密釈』にも、形を変えて引き継がれ、あるいは、従来指摘されることは無いが、同書の五臓理解にも浅からぬ影響を与えていると考えられる。

『五輪九字明秘密釈』では、両部と理智を心の曼荼羅、その心を自性法身の仏と説く一方で、同時に身中の五臓を指して、色心不二の六大法身、ないし毘盧遮那平等智身ともする。その五臓が、外に出でては五行となり、色心の諸法を生み出す本源ともなる。[3] 付記しておくと、『真言浄菩提心私記』では、毘盧遮那平等智身は、行者の菩提心とされている。

一　覚鑁における心身間の不二・即一説

『般若心経秘鍵略註』では、衆生の心と、その依となる身とを智と理、ないし金剛と胎蔵の両部の一々へ配釈する。

今且ク以テ彼ノ理智等ヲ配ル此ノ身心ニ故ニ一往配釈ス。理実ニ互ニ通シ金胎本ヨリ不二身心常ニ即一ナリ。（中略）衆生ノ九識ト諸仏ノ五智ト群類ノ異身ト四身ノ一理ト皆是三平等之一心ナリ。[4]

そして、その理智と両部が各々本来不二であるから、身心も同じく、常に即一となると説かれる。更に、その衆生の識心と身、識の転じた仏の五智と、及び四種の仏身の何れもが、また、一心そのものとみなされる。

続いて『心月輪秘釈』は、末尾の天治元年の識語から、覚鑁自身、高野山と京都を往復し、真言の諸法流の修学に努めていた時期の著作と知れる。本書では、横ざまに言う場合に、心は四種曼荼羅の総体、胎蔵＝真如の理と金剛＝実相の智の、両部の曼荼羅を摂し尽くす根本ともなると説かれる。[5]

二ニ両界ノ義ナリ。謂ク月輪ト者両部瑜伽之総名二界曼荼之全体ナリ。色心ノ諸法尽ク摂ス二此ノ門一ニ。[6]

心と相即である月輪も、同じく胎蔵と金剛の両部の瑜伽を総べる名であって、その中に色心の諸法を摂し、また、両界曼荼羅の全体でもあると明言される。

又言フレ身ト者体依聚ノ義ナリ。是レ亦月ノ義ナリ。《vaṃ》等ノ六大是其ノ体性ナリ。《maṃ》等ノ四曼ハ即チ此レ能依ナリ。[7]

『心月輪秘釈』において、覚鑁が、『般若心経秘鍵略註』の様に明瞭に心身間の関係に言及することは無い。しかし、心の下での両部、理智の不二を説き、また、右の様に、身の「体依聚」の義をそのまま月の義とする点も考慮すれば、少なくとも『心月輪秘釈』を著した三十歳の時点で、覚鑁が心身間の不二・即一説を構想していた可能性は、十分に想定される。

二　『打聞集』に見る心身の而二・平等説

覚鑁が大治五年に再興した伝法会における覚鑁自身の談義を記録したものが、『打聞集』である。[8] その大治五年以後、覚鑁が四十歳となる長承三年（一一三四）までの何れかの時期での開催と考えられる「二教論之談義時」に、覚鑁は、空

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

海『請来目録』を踏まえ、(9)次の様に説いたと記される。

又顕教ニハ諸法ハ一心ヨリ生ストニ云テ非情草木ヲ本有トハ不レ云ハ。皆理ニカコツケ従リ理生スル故ニ理常住ナレハ所生ノ法モ常住ト云フ也。真言ハ三密平等ナレハ身モ本有不思議ノ大日覚王ノ体（中略）。更ニ身口ハ従リ心生ストハ不レ云ハ。(10)

顕教では、能生の理が常住との意味から、所生の法も常住と言うのみで、非情草木そのものを本有とはしない。対する密教では、身口意の三は個別平等に本有であり、逆に、心より他の諸法が生じるとも説かず、種々の事物、衆生の身体は、そのまま本有不思議の大日如来の身体とみなされる。(11)

『打聞集』の右文では、心身間の不二・即一説に対する、而二・平等説が教示される。また、短縮されてはいるが、類似の記述が『五輪九字明秘密釈』中にも確認される。

顕ハ説キ一心真如ノ本ヲ密ハ説ク三密平等ノ旨ヲ（中略）顕ハ以レ理ヲ為シ衆色ノ本ト密ハ説ク不レ壊セ色ヲ是レ理ナリト（中略）顕ハ説キ理一事多ノ義ヲ密教ハ俱同俱別ノ談ナリ。(12)

右が、『五輪九字明秘密釈』からの引用である。顕教が色法の根本である真如の一心を説く一方で、密教は、身口意三密の平等を説示する。また、顕教が、理を事の帰すべき一なる存在、事を多なる存在としても、密教では、理と事は同一である一方、別異ともみなすと記される。

三　『五輪九字明秘密釈』における五臓と心

その跋文の記述から、『五輪九字明秘密釈』は永治元年以降、覚鑁の最晩年の著述と推測される。(13)

本尊ト行者ト本来平等ナレハ我覚ス本初ヲ。我ハ是レ古仏ナリ。智界理界ハ我カ心ノ曼荼ナリ。五部三部ハ即チ是レ我身ナリ。(14)

先の『心月輪秘釈』と同様、覚鑁は本書でも、智＝金剛と理＝胎蔵の両部を真言行者の心の曼荼羅とし、また、この心を指して、「一心ハ法身自性ノ仏ナリ」とも解説する。(15)

夫レ真言ノ浄菩提心ハ是レ自性法身ノ心地法界（中略）亦一切衆生ノ色心ノ実相（中略）又同疏第一ニ云ハク一切衆生ノ色心ノ実相ハ従リ本際ニ已来常ニ為リ是レ毘盧遮那平等智身ニ。(16)

『真言浄菩提心私記』でも、覚鑁は、行者の菩提心をして、同じく自性法身の心地等と説く。その上で、それを一切衆生の色心の実相でもあるとして、菩提心と、『大日経疏』に言う毘盧遮那平等智身とを同一視する。この毘盧遮那平等智身は、『五輪九字明秘密釈』では、身中の五臓の意義を総説するにあたって、次の様に論及される。

一切衆生ノ色心ノ実相ハ無始本際ヨリ毘盧遮那ノ平等智身ナリ。色ト者色蘊ナリ。開キテ為ル五輪ト。心ト者識大ナリ。合スレハ為ル四蘊ト。是則チ六大法身法界体性智（中略）色ト者不レ離レ心ヲ五大ハ即チ五智ナリ。心ト者不レ離レ色ヲ五智ハ即チ五輪（中略）色心ハ不二ナルカ故ニ五大即チ五蔵ニシテ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

五蔵即チ五智ナリ。(17)

最初に、毘盧遮那平等智身に関する『大日経疏』の記述が掲載され(18)、続けて、色法の五大と心法の識大が一となった六大法身への言及がある。そして、色心が不二であれば、肝から脾の五臓が五大と、更に五智そのものともされる。五臓こそ、六大法身や毘盧遮那平等智身がそうであるように、色心をなかだちし、それらを束ねる存在と説示される。

結論

以上の検討から、覚鑁が、様々な師に就いて真言の諸法流を修学していた三十歳の時点で、その心身間の関係論の一である不二・即一説を既に構想しており、また、三六歳を過ぎて、弟子達を前に自ら談義を行う様になって後、その而二・平等説をも主張し始めたと、第一に推測される。

『打聞集』の心身の而二・平等説は、簡略化された形で晩年の『五輪九字明秘密釈』にも掲載される。本書では、また、五臓を六大法身、毘盧遮那平等智身ともするが、そこにも、心とは個別平等に、衆生の身を大日如来の本有の身とする『打聞集』の同説からの影響が看取される。この様な五臓、及び身体に対する独特の認識が、『三種悉地軌』に拠るばかりでなく、心身の関係論として、若年より覚鑁の内に胚胎されていたことの意義を、今後考究する必要がある。

1　湯浅泰雄「宗教的修行における心と身体　密教の修行論とマンダラの心理学」（『講座　日本思想』一、一九八三、東京大学出版会）、吉田宏晢『空海思想の形成』（一九九三、春秋社）、大久保良峻『台密教学の研究』（二〇〇四、法蔵館）。　2　橘信雄「興教大師覚鑁の両部不二思想―六大法身の成立に関する一考察―」（『豊山学報』四四、二〇〇一）。　3　『興全』下・一一四三頁。　4　『興全』上・一三五頁。　5　『興全』下・一〇四六頁。　6　『興全』下・一〇五〇頁。　7　『興全』下・一〇五一―一〇五二頁。　8　松崎恵水「打聞集について」（『大正大学研究紀要』五七、一九七二）。　9　『弘全』一・一〇二頁。　10　『興全』上・四一四頁。　11　この『打聞集』の記述は、円珍『雑記』の心身論との強い関連を想起させる。　12　『興全』下・一一二六―一一二七頁。　13　『興全』下・一一八〇頁。　14　『興全』下・一一四六頁。　15　『興全』下・一一六〇頁。　16　『興全』上・二〇五頁。　17　『興全』下・一一三四頁。　18　『大正』三九・五八五頁中。

〈キーワード〉覚鑁、心、身体、両部不二、而二、五臓

（龍谷大学大学院）

NII-Electronic Library Service